

- ◎山田さんから、「比良に行こう」とメールをいただき、あれやこれやの連絡のあと、今電車に乗っている。「たぶん 同じ電車の はずだが・・・」と思いながらも、お互いにスマホで連絡しない、この不思議な性格である。ホームに降り立ち振り向くと、後ろの車両から姿が見え、お互いに破顔を交え、「最後にあったのは いつだった・・・」「ええと・・・」なんと半年前の11月に、愛宕と若狭駒ヶ岳を一緒に来ていた。駅で登山届を出し、地図を渡し、登山口までの20分を話しっぱなしである。
- ◎9時に登り始めた。天気は快晴、ほとんどが青空で少しだけ白い雲、陽が照り樹々の隙間から木漏れ陽が地面にまだら模様を見せる。YAHOOの天気予報ではこのあたりは一日中お陽さまマークだったが、山の天気予報では登山に適さないと出ていた。「こんなにいい天気なのに 適さないとは・・・」と不思議に思いながら、上着をザックにしまい、背中にポカポカ陽気を感じて、エンヤコラ登っている。
- ◎9:40涼峠に到着。前の週に坊村から武奈ヶ岳に登った時は、「さむい 風がきつい」と叫んでいたが、今日は琵琶湖に面した南斜面なので暖かい。ただ空の上で、風の音がご〜ご〜泣いている、天気予報師はこのことを言っているのかなと思っていた。汗がにじみ出た身体に冷たい風が心地いい。
- ◎2本目3本目あたりの雰囲気素晴らしい。左は切り立った崖があり、チラチラ琵琶湖を眺め、鞍部はだらりと広がりを見せ、湿った地面に倒木が腐りはじめ、苔と菌類が魅惑的な色を示す。広角レンズを持つようになり小さいものは写さなくなったが、今日の明るさ、しかも湿ったところでは、「ああ レモン色の菌が・・・」後ろ髪を引かれる思いで通り過ぎた。
- ◎なんと前回よりも寒い、風もきつい、もうすぐ、ヤケオ山というあたりで一本取って、前回同様ザックの中の雨具の上着を出し、フードをかぶった。「登山には不適な日です」というフレーズが納得できる。風が崖の方に向かって吹いている、「おととと」とまで風がきつくないが、崖がえぐれた所はじっくり歩いた。
- ◎景色がよく見える、蛇谷ヶ岳の麓の村の黒い藎、田んぼが広がり水が張られている。蛇谷中腹にあるお寺の屋根が光っている。地図で見ると寺と神社が見える、登山道が見える、ガリバー旅行村が見える。電車の車窓からも田植えの終わっている田んぼを見つけた。このあたりの田植えは、茨木より一か月早いようだ。
- ◎12時過ぎにてっぺんにやってきた。「腹が減った メシだ」釈迦ヶ岳には5.6人の人たちが飯を喰っていた。登りの斜面はきつい風、フードをかぶって登ってきたが、ここに来ると風がなく穏やかで暖かい。ぽっこり広場で腰を下ろした。途中サンドイッチを半分喰っただけの腹は、少なめの弁当をあっさり片づけ、まだ喰いたいと催促をするので、残っていたサンドイッチもその場で食べた。最近は少食になって体調も良く山も楽しんで登れるが、非常食が足りないといけないよね。
- ◎山田さんが、「ワングルの 西側の道」と提案があったので、地図で探した。1時頃から下りはじめ、だらりんを少し行くと、左がワングル道、右がリフト駅となっている。急なところもあるが難なく下る、「あれれ ええ シャクナゲ・・・」なんとシャクナゲが満開である、右や左のシャクナゲがあかあか咲いている。かつて、大嶺奥駈道を歩いた時、後半の和歌山に近いあたりでシャクナゲの満開を見た。オレの記憶ではもっと白っぽい花、白に多少ピンク色がかかっていると思っていたが、今日のシャクナゲは、紫がかかったピンクが鮮やか、白っぽさなど感じない、ピンクのシャクナゲである。
- ◎ケーブルとリフトの乗り換え場所、コンクリートの床と壁が残っている。そういえばここで何度も乗り換えた思い出がある、雪の時も来たことがある。これが廃止になって30年ぐらい経ったかな。さらに進んで分岐に、神霊の滝と書いてある、「なんと読むのかな」と調べるとシンジだ。神霊：三種の神器の総称：その一つの八咫瓊勾玉：やさかにのまがたま。この神霊の滝はやや危険ルートらしい、登った方の手記も載っている。以前、北比良からカモシカに下る時、トラバースの斜面を行ってしまった。行けるだろうと進んだが、恐がりのオレには、ひやひやものだった。
- ◎イン谷口には、またもや、消防車3台、救急車、パトカーが止まって、10人ぐらいが円座を組んで話していた。
- ◎平日でバスがなく、1時間かけ比良駅まで歩き、帰宅したのは6時前だった。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎展覧会の準備であれやこれや、ぼやきが少し遠のいているのは“そおりい”である。今回は最後の方を読み終わったので、「まだ 知らない部分は」「サホビコ・サホビメ」の項を見つけ読みだす。

◎天孫降臨で九州に降り立った、ニニギから時が経った。イハレビコと、兄イツセが新天地を目指し東に向かう。難波から、熊野に向かい、熊野から大和に向かった。この間にも、代が替わっていった。

◎神々の語りごとの果てのところ、カムヤマトイハレビコがこの中つ国の主となり、畝火の白檮原(かしはら)の宮に坐して、イスケヨリヒメを妻にしたのじゃった。イハレビコが亡くなったのちに、日継ぎの争いが起きたよう。

◎カムヤマトイハレビコ：初代天皇：神武

◎八継ぎの大君：2代綏靖(すいぜい)～9代開化までの八代の天皇については、系譜だけが存在し、その事績については何も語られていない。実在性のほとんどない天皇たちで、「欠史八代」と呼ばれる。

◎欠史八代は、「何も語られていない」とは言うが、まとまりのある語りごとはないが、だったら、大君の宮の場所、后と御子のことが語られる。数ある后と、もっと数ある御子の話は割愛して、宮を列挙していく。

◎畝火の白檮原(かしはら)の宮・葛城の高岡の宮・片塩の浮穴の宮(高田市の片塩町)・軽の境岡の宮(かるのさかいおか：橿原市)・葛城の掖上(わきがみ：掖上村：現御所市)・葛城の室の秋津島・黒田の廬戸の宮(いおと：田原本町)・軽の境原の宮・春日の伊耶河の宮(いざかわ：奈良市の中心地かな)・師木の水垣の宮：桜井市

◎ミマキイリヒコ：師木の水垣の宮：疫病(えやみ)がこの国に流れ広がり、今にも人々が死に尽きてしまいそうになったのじゃ。それで、なすべき手立ても使い果たした大君は、どうすればよいものやらと憂え嘆いての、神の教えを聞こうとして、来る日も来る日も真っ暗な殿のうち設えた神牀(かんどこ)にじっと座り続けておった・・・。

◎おそらく天然痘であろう。原因は、悪神の仕業だろうと考えられていた。古代の天皇はシャーマンであり、神の教えを聞くことが重要な役割であった。神床と呼ばれる神聖な場所に座り続け、多くの場合神のお告げは夢の形で現れた。天皇は夢見のシャーマンとして、こののちも多く語られる。

◎大君がまどろんだすきに、オホモノヌシ(三輪さんに鎮座する神)の大神が顕われ、「疫病(えやみ)を鎮めるに オホタタネコをわが前に 祀れ」

◎大君は、オホタタネコという名の人物を探させた。幸いにも、河内の美努(みの)の村で見つかった。大君は、すぐさま、この、オホタタネコを取り立て神主として、オホミワの大神の前に額ずき、齋き祭った。あわせて、東の方、宇陀の墨坂に座ます神に赤色の盾と鉾を祭り、西の方、大坂に座ます神に黒色の盾と鉾を祭った。ようやく疫病の気は鎮まり国の中は安らかに平らかになったのじゃった。

◎ミマキイリヒコ大君の時代、「初めて国を統：すべたもうたミマキの大君」という。

◎ミマキイリヒコ大君の叔父、オホビコが、その腹違いの兄、タケハニヤスが、「邪まな心を起こした」と攻め入った。川を挟んで対峙し、矢合戦でオホビコが勝利した。

◎その後、オホビコは、高志(こし：越の国)に、その子が東の道をめぐって、国の政を和らげ平らげて返り言を申し上げたのじゃった。そういうわけで、天の下は平らかになり、人々は富み栄えることができたのじゃ。それで、人々も豊かになったというので、この大君の御世に至って初めて、男たちは弓を使うて得た獲物の、その肉や皮を貢物として差し出させ、女たちには手を使うて織りあげた布や糸を貢物として差し出させなされたのじゃ。

◎ミマキの大君の御年は、百あまり六十あまり八歳で、御陵は、山辺のまがりの岡の上にある。

- ◎木地山から、高島トレイルに登る道はいくつかあるが、与助谷山コースは知らなかった。半年前に山田さんに連れられ、横谷峠から与助谷を下った。「おお これは歩きやすいルートだ ぜひまた来てみたい」と思いながら今日になった。何日か前から地図を作り計画表を作り、何人かをお誘いしたがキャンセルが相次ぎ、前川さんとのふたり山行となった。
- ◎8時10分、登山口から登っております。有賀さんの家の前に駐車させてもらい、「帰りに寄ってよ コーヒー飲んで帰って」と嬉しいお言葉。ここは麻生川の終点集落、百年前ぐらいは200人ぐらいの人が材木関係の仕事をしていたところだと聞く。文化圏は朽木よりも木地峠を超え小浜との交流が多かったようだ。「鯖街道」という言葉があるが、サバも人も物も荷を背負って峠を超えて行った、木地村の人はサバ街道はうちの事と言っていたそう。オレは根来峠の方が多かったのではと想像している。ただ現在は、3軒しかないらしい。
- ◎このコース、11月には下りだったが、今日は初めての登り、尾根筋ながら、幅の広いポコリン尾根道、急なところもあるが、おおよそならかて歩きやすい。
- ◎WEBの地図にコースタイムが記されてなかったが、木地峠までのコースと比べ同じぐらいの時間だろうと思い、乗越まで90分ぐらいで着くだろうと計算していた。前川さんは膝いたが癒え、今日は久しぶりの登山だという。健脚の方だけれど、筋力体力が落ちているので、ゆっくり30分に一本のペースで登った。先日来何度か比良を登ったが、「もう春だから シャツの重ね着ぐらいでいいだろう」と軽装で入って、歩き始めてすぐに雨具の上着を羽織り、頭のフードをかぶって寒さをしのいだ。あの寒さにこり、今日は厚手のシャツに厚手のヤッケを着てきた。空は快晴、白い雲も探さねば無いぐらいの真っ青な空、風もほとんど吹いていない。さすがに今日は暖かい、厚手のシャツも厚手のヤッケもザックにしまい、薄い長そでシャツで登っている。ただ、朝の8時前に着いた時、有賀さんが、「10度を切るよ まだストーブを焚いているよ」と言っていた。
- ◎1時間ぐらい来たあたりでスマホの地図を見ると、もうすぐそこが乗越である。ゆっくり休憩しながらでも90分ぐらいで登れそう。せっかく作った地図をアトリエの床に忘れてきた。「これをザックに入れなければ」と床に置いたのにと悔やんでいる。どうも、忘れ物があるねえ。尾根に近づき標高があがりブナの樹が出始めた。「よ カッコいいぜ」「おお 饗庭の ドンが聞こえる ロシアの戦争で 気合が入っている か」
- ◎ゆっくり3回も休んで90分ということは、もっと早く登れるコースかな、なんて思いながら尾根道を右に向かって、駒ヶ岳を目指している。ICレコーダーに風のピ〜プ〜音が入っている。南斜面の登りは穏やかな暖かさだったが、ここ江若尾根、日本海から吹いてくる冷たい風がまともに当たる、ザックからヤッケを出しフードをかぶって歩いた。右の方、滋賀県側は杉の植林が谷の下まで続いている。一方左の方、福井県側は広葉樹の雑木樹林帯、「琵琶湖が見えるな」と思っていたが、「まてまて あんな大きな船は琵琶湖に いないぞ あれは若狭湾だ 日本海だ」と思い直した。
- ◎11時前にてっぺんにやってきた。てっぺんと言ってもなだらかな尾根道のひとつのピーク、白い石がゴロゴロの上に、十字の標識が立っていて、駒ヶ岳780.1Mと書いてある。コンマ1とは10センチ、その10センチはどこのことですかね、山のてっぺんで、コンマの下まで書いてある標高は在ったかなと不思議に考えている。三角点も隣にあった。〈国土地理院にも、コンマ1と書いてある、と確認。〉
- ◎少し早いが弁当を広げた。屋近い時間になると寒さも和らぎ、ゆっくり弁当が広げられた。「これ 食べて」と卵焼き、サラダ、スナックエンドウの湯がいたものがシャキリ美味い、ミカンにイチゴまで出た。
- ◎「ピーチク ピーチク ピー」盛んに鳴いている、なんていう小鳥でしょうね、姿は見えない。
- ◎江若尾根の樹々の風景は格別だねえ、と悦にいつている。先日来の比良とは樹々の風景が違うんだねエ、しかも昨日雨が降ったのか、地面は湿っているし、苔の緑が瑞々しい、ほんと水のおかげの、水みずしさなり。
- ◎11時半には出発し、分岐には12時半に着いた。「えええ この分なら 1時半ごろにはコーヒーが飲めるかな」なんて言いつつ、何度か休んで無事下山した。有賀さんのお言葉に甘え、コーヒーをいただき、お菓子をいただき、1時間弱話をして失礼した。

◎5月中旬、ICレコーダーを持って河原に来ている。早朝はまだ上着を着て、少し寒いかなと雑用をこなしているが、12時を過ぎると暑くなってくる。今日も天気がいい、陽が当たる、影がきつく出ている。山用に幅広の帽子を買ったが、これが大変便利、野球帽では防ぎきれない照り返しを防いでくれる、頭がなんだか涼しい。空はまっさお、少し霞んでいるが雲ひとつない、と振り向けば、後ろの方、地球に近いあたりに白いものがかすかに掃いたようにある、あれも雲のうちだ。昨日は展覧会の搬入、雨が時々降っていた。オレの絵は大丈夫とはいえ、雨の中、絵を運ぶのは大変だと思っていたが、晴れた時間帯に絵が運べた。パラパラ何度か降ったようで河川敷の舗装に水溜まりのできたところがある。半年ぐらい前に安威川ダムが完成し、そのころから川の流れが細々してきた。いつもなら大きな鯉の姿が見えないような流れだが、何度か大きな鯉が浅瀬に乗り上げ死んでいる姿を見た。しばらくそんな浅い川を見ていたが、急に水が多くなった。ニュースで、「安威川ダムの試験放流」なんて言っていた。このダムは大人のおもちゃだね、いい年をしたおっさん連が、「ええ ちょっと流そうか」「おお 少しハンドルを閉めようか」なんて楽しみながら、大きなダムのふたを開けたり閉めたりしているのかな。何度かの大雨で、ダムが満杯になったのか、じわりじわり流しているようで、安威川にしてはたっぷりの水、鯉も泥に交じった水に逆らって一生懸命漕いでいるのかな。

◎昨日は展覧会の飾りつけをした。その前日が、同窓会で酒飲みの日、「ほどほどにしとかねば 飲み過ぎたらアカンよ」といい聞かせつつも、昼の12時から始まり、出席点呼やら、物故者黙とうやらで、まずはシャンパンで乾杯。ボーイ君がビールを、次にワインを、「ううむ 美味しい」と飲み喰い始めた。例年、ここのホテルの食事は量が少なく、終わったころには腹が減ったなという状態だった。隣の元検事の皿を見ると美味そうなものが残っている。「食べないの？」彼の説明によると、ゴルフの最中に倒れ一命をとりとめるような心臓の暴走、大手術、ということがあったらしい。大きな声で元気に喋っている彼だが、いまだ食事療法、脂っこいもの、クリーミーなものはダメだそうで、「オレ 喰うぞ」と2.3皿いただいた。おかげで最後まで空腹は免れ、一献一献いただき、次の店、そのまた次の店と歩き回り、帰ったのは夜の9時頃だったかな。

◎話が飛んでしまったが、展覧会、オレの前の方が内藤さんだった。「飾りつけ手伝いますよ」と前々から言っていた。もうふたり、共通の友人が、「ふたりの展覧会を1回で見られる 2回も足を運ばなくていい」という理由で、「内藤さんの搬出も手伝うよ、岡村さんの飾りつけも手伝うよ」ギャラリースタッフのミカさんと計5人体制でことが運べた。内藤さんの作品はキャンバスの上に泥を塗った現代美術、作品はなかなか面白い。面白いのはいいが、泥の作品、耐久性や、堅牢性にはおそらく弱いはず、その搬入作業も手間と時間のかかる作業だと思われる。搬出もひとつひとつを、プチプチの梱包材で包み、そっと箱に入れ車に運んでいった。

さてオレの作業。車には二日前の日に積み込みを終えていた。雨の合間をぬって、一枚一枚重ねて積んだ。その積まれた絵を、また一枚一枚駐車場の舗装の上におろした。その一枚ずつを皆さんが会場まで運んでくれた。90センチ角の絵を2枚継ぎ合わせた絵、そんな継ぎ合わせた絵を5.6点用意した。まずは画廊で継ぎ合わせ作業。裏に材木の棒を合わせ、木ねじで止めていく。今回は電動ドリルがあるので楽ちんだと思っていたが、電動ドリルが煙を出している、火花を出しているということで、手動でドライバーを回した。「さあ壁に吊るぞ」「高さは こんなものかな 下端合わせで 26センチ」なんて言いながら12点ほどの絵を飾り終えるのに2時間かかってしまった。そのあと5人で軽くお茶をと車で近所まで行った。

◎展覧会のたびに、飾り終わって、自分の絵を見て、冷や汗をかく、舌打ちをする、唇を噛むなんて、自身で自身の絵の評価で、がっくりきていたことも多かった。今回の展覧会、自画自賛、「いいじゃないの これが最初で最後の 大成功かな」なんて思っている。

◎展覧会の飾りつけは2時間で終わった。5人もいて2時間は遅いのか早いのか、どっちかね。今回は90x90cmの絵を二つ継ぎ合わせて一枚にした絵である。画廊の中で絵の裏に板をあて、木ネジで継ぎ合わせた。そのタイプの大きなものが6点ある。その6点をそれぞれの場所に置いてみる。間隔を見てメジャーで計り、配置場所を決める。天上のピクチャーレールから吊り金具を下げていく。まず簡単に吊っていく。それから下端あわせでメジャーをあてる。「5ミリ上げて こっちは3ミリ下げて おおびったり」なんて作業である。そんな作業が着々進み飾り終わった。もしこの作業を一人でやるとなれば大変だっただろうと思いながら、前日の深酒を反省した。「酒を食らっている 場合じゃ ないですぞ」と恐れ入った。飾り終わって自画自賛の満足であると言っているが、絵と絵の間はこの倍ぐらい欲しい。狭い壁面にびっしり感は否めない。何年か前の四国を思い出した。愛媛県のホールの壁はゆったり絵を並べられた、しかもゆったりしたその隙間がぴったりだった。四国の場合は、売らなければと小さい絵もいくつか飾った。小さい絵を飾って、売ろうとするのはいいことや悪いことやら・・、考えるね。今回はまったくの見せるだけの展覧会、大きな絵ばかりを飾った。

◎安威川の水の流れを見ながら、「車の 黒い タイヤが 半分 水の中から 顔を出している」と見ていたが、なんとデカイ亀だった。横にも小ぶりのものが2.3いて、「ええ あんなデカイ亀 外来種かな」いずれにしても、あの大きさは初めて見たスケールだ。普通に子ども時代から見知っている亀の2.3割増しの大きさだ。毎日来ている安威川、草に水、鳥たちも多い。「そうだ 夜の草むらで ストレッチをしたのがたたったのかかゆい かゆい 蚊かな」いよいよ痒みの季節到来、これは不快だね。

◎展覧会の初日の日に、朝一番に見に来てくれた方がいた。オレの出勤は12時からと書いてあるのを見落とされたか、お菓子をいただいた。なんとなくせかされ11時前には出勤した。すぐに、でっぷりした方、なんと朝一番の方の知り合いらしい。お話の好きな方で、2時間半たっぷり話して帰られた。オレと同年輩の彼は、商業写真の会社の方だそうで、カメラマンだそうだ。早速デジタルカメラの話になった。

◎その方のデジタルカメラの話：ニコン D1 が発売されるまで、ヨーロッパ製のデジタル変換カメラをなんとか使っていたという。

ニコン D1:調べると、たった四半世紀前の事である。日本の成長期時代だったんだ。もっと前からあったと思っていたが、オレが50歳ぐらいの頃にできたカメラだったとは。

それまでは、まだまだフィルム全盛時代、「デジタルの色は汚いね 空々しいね」と素人ながらに思っていた。パソコンのモニターも、ブラウン管の重いものを使っていた。「そらあ デジタルの色はきれいよ」という言葉に踊らされたが、今思えばブラウン管の色の方が、落ち着いたしっとり系だったかな。

彼の話では、それでも商業写真の世界は画像のデジタル化がぼちぼちではじめ、「もう フィルムの時代じゃない」と旗を振っていたそうだ。「ただねえ 撮影の事 フィルム技術がわかっていないと いけないねえ」ともおっしゃる。「写して あとは パソコンで修正」「これはいけない 修正の要らない写真を 撮らないと いけない 一発で バシッとしたやつを 撮らないと だめだよ」とおっしゃる。

オレにとっては耳の痛い話。写してきたものを、パソコンで右や左に修正、加工は毎度のことだから・・。彼、「今のデジタルカメラは 優秀だから ちょっとボタンを 回す ねじる そんな作業で あらゆる操作ができる」とおっしゃる。「ISO が 800 以上は アカンよ」と中西さんが言っていたが、その方の話では、「ISO を どんどん回しても さほど画質は悪くならない」「なので 暗いところでも ストロボを焚かずに きれいな写真が 撮れる」「ストロボの 焚けない 現場や 舞台や には フィルム時代と比べ 便利だよ」これは知らなかった、いいことを聞いた。薄暗い画廊の中でも、ちゃんと撮れる、人の顔もその後ろの絵の表情も撮れる、ということなんだ。

◎展覧会で“中原中也”という言葉を見た。「ええ どんな詩・・・だったか」「汚れちまった・・・」「おおお」

汚れちまつた悲しみに
今日も小雪が降りかかる
汚れちまつた悲しみに
今日も風さえ吹きすぎる

汚れちまつた悲しみは
たとえば狐の皮裘
汚れちまつた悲しみは
小雪のかかつてちぢこまる

汚れちまつた悲しみは
なにのぞむなくねがふなく
汚れちまつた悲しみは
倦怠のうちに死を夢む

汚れちまつた悲しみに
いたいたしくも怖気づき
汚れちまつた悲しみに
なすところなく日は暮れる・・・

◎ついでに萩原朔太郎

ぬすつと犬めが、
くさつた波止場の月に吠えている。
たましいが耳をすますと、
陰気くさい声をして、
黄いろい娘たちが合唱している、
合唱している、
波止場の石垣で。

いつも、
なぜおれはこんなんだ、
犬よ、
青白いふしあわせのいぬよ。

◎ついでに我が友人の、故：吉谷純和君

野良犬が 交差点で おおみえを切っている

◎明治・大正時代の詩、どうも、ピンとこないね。オレが低俗なのかね。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎サホビコとサホビメ。兄妹の禁断の愛、夫への裏切り・・・夫とはいえ、夫は大君・・・。

◎イクメイリビコイサチは、師木の玉垣の宮に座して、天の下を治めたもうた。幾人かの妻を娶り、御子たちは十あまり六柱、その中で、オホタラシヒコオシロワケがあとを継いで天の下を治めたもうた。このお方は大きな体を持っておっての、背丈は一丈と二寸（よさかとひととき）もあったと伝えられておるが、まことかのう。

◎イクメイリビコの大君は、サホビメを后となさったのじゃが、その時に、サホビメと母を同じうする兄のサホビコがの、同じ腹の妹サホビメに、「夫と兄と いずれが愛しいと思っているのか」と尋ねるとの、サホビメは、「お兄さまを愛しいと思っています」と答えたのじゃ。

こう聞いたのは、兄のサホビコの心には企みがあったからでの、

「妹よ まことわたしのことを愛しいと思っているのであれば わたしとそなたで天の下を治めようではないか」と言うての、すぐさま、幾たびも、幾たびも鍛えた切れ味の鋭い紐飾りのついた小刀を作らせての、それを妹のサホビメに手渡し、

「この小刀で 大君が眠っているところをねらって刺し殺してくれ」というたのじゃ。

◎夫と妻という夫婦関係にある男女と、兄妹による祭政の分嘗（てわけ：彦姫制）が行われていた古層の社会において強い絆で結ばれた兄妹。母系的性格の氏族が、父系的構造を持つ兄弟国家に吸収されていく。

◎「大君を刺し殺してくれ」と言われたサホビメは驚いたがの、愛しい兄の頼みじゃで断ることもできずに、大君のすきをねらっておったのじゃ。ところが、大君はそのような企みがあるなど思いもよらず、愛しい後の膝を枕にしての、昼寝をしておったのじゃ。

すると後は、兄が渡した紐付きの小刀を懐から取り出しての、おのれの膝を枕に寝ておる大君の首を刺そうとして、三度小刀を振り上げたのじゃが、そのたびに哀しい心がわくのを抑えることができなくての、首を刺すのをためらうておるうちに涙があふれて、大君の顔に落ちて流れたのじゃった。

大君は驚いて飛び起き、後に尋ねた。

「われは あやしい夢を見た。沙本のあたりから叢雨（むらさめ：にわか雨：驟雨）が降って来て にわかになが面を濡らした。また 錦色をした小さな蛇が わが首にまとわりついた。こうしたありさまを夢に見るといふことは いかなる表（しるし）であろうか」

いにしえの後は、神の声を聞くことができる力をもつ方じゃでの、大君は夢見た神の教えをしようとしたのじゃ。

映像としてあらわれた夢は、シャーマンによって解釈される必要があり、その役割は、神懸かりの能力を持つ后によってなされる。

◎その大君の言葉を聞いて、サホビメは隠しておくことができぬとおもうたのじゃろう。大君に向かうと今までのことをすっかり打ち明けたのじゃ。

◎サホビメの告白は前に語られた部分をそっくりそのまま繰り返すかたちでなされる。こうした構造は音声による語り一般的な表現方法である。

ひとことだけ、「兄の言葉に逆らえず・・・」が付け加えられている。狼狽しながらも、とっさに自己保身をしてしまうサホビメの心が読み取れる。

◎いよいよ戦が始まる。

◎展覧会もほぼ終盤、5月15日、飾りつけから始まって、5月31日までの二週間、半月の長丁場だ。あと出勤が二日と車いすの友人を送迎する日が残っている、「いやあ 長丁場は疲れるねえ」とぼやきから始まる。

◎5月の15日、前の日が一年ぶりの同窓会、「ちょっと 酒を控えんと・・・」なんてちらっと頭の隅をよぎったが、昼の12時から飲み始め、家の帰ったのが夜の9時頃、翌日、朝起きたころには、頭の中にまだまだたっぷりの酒が残っていた。前日に、絵は車に積み込んでいた。あれも、これも、忘れてはいけないぞと積み込みは終わっていた。ちょっと大きめの絵がたくさん、積めるだろうと思っていたが、積み始めると思っていたより寸法が大きい。「え まさか ダメか」なんて行きつ戻りつ1時間ぐらいかけて積み込んだ。

◎オレの前の会場利用者が、十歳若い北野出身の高校美術の元先生：Nさん、「飾りつけ 手伝いますよ」と言ってくれていた。またまた、オレとNさんの共通の知人が、一度に二人の展覧会を見るために、Nさんの絵を見て、Nさんの片づけを手伝って、オレの飾りつけを手伝って、終わったらオレの絵を見る、という寸法で行くと言ってくれた。またまた、オレとNさんの共通の知人がもう一人現れ、同じ手筈でやって来てくれるという。結局、4人の方がたの手をお借りできる算段になり、飾りつけも簡単にすませることができた。

◎この展覧会、会期が二週間もあるので、中の六日間を出勤日と決め、案内状に印刷した。案内状を作りながらどう表現したものやら、文章だけでいくか、表を作るのかと迷った。定休日があり、最終日は開店時間が変則であり、オレの出勤日、出勤時間と、お知らせ内容が豊富、「むむむ」と考えた末、日の数字を色分けして描いた。「これでいいだろう いいじゃないか」と本人だけが納得していたが、皆さんそこまで詳しく見てくれないようで、「なんだ 会場に 居ないの 会いたかった」という方が何人かおられた。

「こらあ 出勤日を気にせず 2.3時間行った方がいいな」と連日会場にいるようにしている。今日はいない日だからお客さんが少ないだろうと思っていると、次から次にやってきていただく。嬉しい悲鳴である。

展覧会が始まる前は、会期の途中の休みの日に、山でも行ってみるか、5月の山 日々緑が伸びはじめ、樹々のざわめきが楽しめる、と思っていた。ほとんど毎日出勤になると、「ああ 疲れる だるい」と弱音を吐いている。ジジイなんだから仕方がないねと思っているが、よく眠ること、じっくり休むことがいいとわかった。10年20年前から、「眠るのが下手だ 寝不足は翌日にこたえる」と重々わかっていた。とくに飲酒の翌日は、目を覚ますのが早い、目を覚ますと寝ていられない、さっと起き出し、飯だと動き出す。飯を喰ったあと、1時間もすると、眠い、だるいとなってくる。

50歳ぐらいまでは眠るのが上手かった、いつまでも布団の中で眠れた。お恥ずかしい話だが、朝ではなく、昼ごろに起床だったかもしれない。そのあと何時間でも仕事はかどった、身体が動いた、まさに健康そのものだったんだ。眠るのが下手ということはよくない。てなことで、睡眠誘導剤を半分いただくと、それで解決できることを知り、時々いただいている。昨夜も飲んだので今は快適なり。

◎もう10回以所も会場に通ったかな、ガラスの風よけ室の扉を二枚通り抜けると右側に、オレの名前の看板、中の絵の一部が見える。めいっばい明るい光の中にオレの絵が鎮座している。我ながらこれは気持ちがいい、嬉しい楽しい、こんな言葉がひきも切らずの出でくる、ほほほである。

◎昨日は電車で2時間近くかかる遠方から友人が来てくれた。「今 来てるけど ここに 来れるなら 来て」朝一番に電話をいただき取るものもとりにあえず出かけた。話をいっぱいした、聞いた、話した、今の話、昔の話、人のいない会場で久しぶりの会話、おみやげのお菓子までいただき、JR 総持寺駅、わかりやすいところまでお送りした。我々ジジババは、逢えるうちに会ったかねば、ですぞ。

◎ヒゲさんは、二十歳ごろからの友人だ。「あれれ どこで 知り合ったかな」今ふと考え、最初の出会いが思いだせないが、東京新宿の美術研究所あたりかなと思う、多分そうだろう。当時、オレは、山手線新宿駅から歩いて10分ぐらいのところにある、私営の美術研究所に通っていた。

◎美術研究書なんて言葉は、今はもう死後かもしれない。明治以来近代教育の中で、西洋式の音楽・美術が正式教科になり、クレヨン、水彩絵の具、油絵具、そして、それらの使用方法などを勉強し始めた。えかきになるにはデッサンの勉強、絵の基本を学ばなければならない。美術大学出身の方々に混じり、美術研究所上がりのえかきもたくさんいた。

◎多分デッサンをしながら、「ケタイなやつが いるなあ」と思っていたのだろう。何時の日か声をかけ、住まいも近所だとわかり、お互いに行ききをして、よく話し、よく酒も飲んだ思い出がある。

◎三年ぶりのオレの展覧会、関東に住まいするヒゲさんにも案内状を送った。しばらくして封書が届いた。封を開け読むうちに、「おおお えらいこっちゃ たいへんなことが あったのだ・・・」と驚いた。まさかと思い、ネットで検索するといくつかの記事も出てきた。

◎案内状が来てやっと俺の住所がわかり早速送ると書いてある。2003年3月25日夜9時頃、家の建て替えのため、自分で作った掘立小屋の二階で寝ていたら、ゴーという音がするので飛び起き、下に降りたら、彫像が燃えている。目の前で小屋にも燃え移り、何も持たずにそのまま逃げだした。1.2分遅れていたら、死んでいたところだった。

下の村30組の中に恐ろしい奴がいる。“透明人間”になる装置を身につけたやつ、そいつが、プロパンガスのボンベで、彫像に火を点けたようだ。

◎2023年6月の美術手帳に彼のことが載っている。

ヤンキー文化や死刑囚による絵画など、美術の「正史」から外れた表現活動を取り上げ展覧会を扱ってきたアウトサイダー・キュレーター・榎野さんの記事。

丘陵を曲がりくねった山道を登っていると、高さ5メートルほどの真っ白な裸婦像が、脇に立ち並ぶ建物が現れた。近づくと、その虚像の足元で豊かな無精ひげをたくわえた仙人と見まがう風貌の男性が、手を振っている。 彼：福永普男：オレはヒゲさんと呼んできた：もっと知りたい方は、検索してください。

◎彼と頻繁に行き来していたのは、オレが20歳代、30歳代だったと思うが、昔のことで、いつ何をしたという記憶が飛んでいる。下記写真の載っているデカイ彫像を作ったのは50年足らず前の事だったか・・・な。東京の武蔵野あたりのどこかで、お披露目パーティをするから出てこいと連絡をもらって、大坂から、見に行った。真っ白な石膏、大きな裸婦像が7体ほど、野外に置かれていたのを覚えている。

「今夜の 山芋を 掘りに 行こう」少し山に入り、「ここを掘れ」と彼が言う。「五右衛門風呂 ぐらいの大きさを 掘れ」という。「えええ そんなにデカイ穴・・・」彼は、山芋の蔓を見つけ山芋のある場所を探し出し、ここだという。1時間以上かかったかと思うころ、細くやせたゴボウのような山芋が姿を現した。「子どもの頃山芋を掘り出して 料理屋に持っていくと 小遣いがもらえた 貴重な収入源 だったよ」という。それをおろして喰った。天然物は美味しいというが、その味の違いはわからなかった。

◎もうあの巨像は無くなったかと思っていたが、家の近所にあったのだ。というのは、それから10年ほど経った頃、彼は、高知県に帰郷し、そこでまた、作品のお披露目があり、オレは見に行った。以後また、関東に移り住んだ彼、かわいい嫁さんに先立たれた。オレは、死ぬまでにもう一度、彼に会わなければ・・・。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎大君「われは 今少しで欺かれるところであったのか」と仰せになったの、すぐさま軍（いくさ）を仕立ててサホビコを撃とうとなさったのじゃが、その時、サホビコは稲城（いなぎ：簡単な砦）を作って大君の軍を待ち受けて戦いになったのじゃ。

◎おのれの振る舞いがもとで、夫と兄とが刃を交わすことになってしもうて、サホビメはいかばかり胸を痛めたかのう。・・・この時サホビメは、大君に攻められておる兄への思いを抑えることができなくての、大君の宮の後方の門からこっそり抜け出し、兄が立て籠もる稲城に逃げ込んでしもうたのじゃ。ところが、こともあろうに、その時、サホビメは腹の中に子を宿しておったのじゃ。・・・それで、大君は、すぐには攻めることができずにいたのじゃ。

◎そのまま時はいく月も過ぎての、兄の稲城の中に留まっておるうちにの、サホビメが宿した腹の中の子は生れ落ちてしもうたのじゃ。するとサホビメは、その御子を出して稲城の外に置き、・・・大君に、「もしこの御子を大君の御子とおぼしめすならば、お育てくださいませ」との。

◎先生：この子は天皇の子だとみるのが自然である。それをわざわざ、「大君の御子と思召すならば・・・」思わせぶりな言い方をするのはなぜか。この子が、兄のサホビコの子だという考えは避けたい。全てを曖昧な世界で、物語を盛り上げていこう意図があったのだろうか。

◎サホビメの言葉を聞いた大君は、「その兄は恨んでいるけれども、今でも后を愛おしく思う心が抑えることができない」大君はすぐにでも后を取り戻したいので、外に置いた御子を受け取らなかった。

◎そうして、あとで受け取りに行く使いに、「御子を受け取る時に 御子を抱いている母君もかささらってこい髪でも、手でも、触れるままにひつつかんで、外に引きづりだせ」

◎大君の心もちを知り尽くしているサホビメは、髪を剃り鬘をかぶり、玉飾りの紐を腐らせ、酒に着けて衣を腐らせ、あらかじめ備えて、御子を抱いて稲城の外に差し出した。

◎力士どもは、御子を受け取ると、すぐさま、その母君を捕らえようとしたのじゃ。その髪を握ったと思うと髪は落ちる。手を握ると、玉飾りの紐が切れ散り落ちる。衣を握ると、ボロボロになって落ちてしまう。御子を取り戻すことはできたが、母君を手に入れることはできなかった。

◎サホビメへの思いが消えない大君は、「子の名はかならず母が付ける この子の名をどう呼ぼう」

◎「今 稲城を焼く時に、御子は火の中に生まれ出ました。ホムチワケ（火内）といたしましょう」

◎大君、「いかにして、養い育てればよからうか」

◎「乳母（めのと）を選び、産湯を使わせるための 大湯坐（おおゆえ）、若湯坐（わかゆえ：養育集団：母系の一族から選ばれる）を定め、養い育ててください」

◎「そなたの結んでくれた下着の紐は、誰に解かせればよからうか」

◎「旦波（たには）のヒコタタスミチノウシの娘、エヒメ と オトヒメ 心根のやさしい者たち、この二人の女をお使いになるのがよろしいでしょう」

◎先生：下着の紐：結婚した男女は、互いの下紐を結び合い、次に逢うまでほどかないという禁忌があった。万葉集の相聞歌にある。それにしても後添えの後のことまで、サホビメに聞いている。妻の出身一族の意向が反映されているのか。